



佐竹やふろう

動物図鑑 1

イモリ

イギリス人の山荘を出ると私は森の中へと歩みだした。

手にはイギリス人にもらったハチミツの小瓶、胸のポケットには、これもイギリス人にもらった小さな黄緑色のイモリを入れて。

イギリス人が言うには、森の中に大きな花が咲いている。その花は大変昔からそこに咲いていて、物知りで何でもよく知っているから、私の恋の悩みもすぐに解決してくれるだろう……

もう夏も終わりだった。森の中にはかすかに道がついていたが、歩きやすいとは言えなかった。森は平らではなく起伏があり、上がったたり下がったりする道には一抱えもある尖った石があちこちに埋まっていて、常に地面を見て歩かないとつまづいて転んでしまう。またときには大きな木の根が絡まり合った上を越えていかねがなかった。

辺りにはいくつもの沼があるとイギリス人は言っていたが、道の両側には背の高い草が生い茂っていて何も見えない。しかし道の低いところにさしかかると、確かに道は柔らかな泥となり、白黒のしまのある大きな蚊がうよいよといて、私にうるさくまとわりついては首筋や手や足を刺した。ときどき遠くで鳥が鳴いた。

やがてせせらぎの音が聞こえてきた。川だった。川は左手の茂みの中から流れ出て、段々になった石の上を心地よい音をたてながら流れ落ち、右手へと下っていた。その先を目で追うと、はるか向こうに水草に覆われた沼の水面が垣間見えた。

私がおその冷え冷えとした水の流に手を浸していると、胸のポケットからイモリがするすると這い出してきた、いきなり水面へとジャンプした。私はあわてて靴を脱ぎ、裸足でせせらぎの中へ入るとあちこちを探したが、見つけられなかった。イモリは行ってしまったらしい。諦めかけたところ、水に落ちた枯れ葉の下に、よく似た色と形のイモリがじっと潜んでいるのを見つけた。大きさはイギリス人にもらったものよりも少し大きいようだったが、別にかまわんだらう……私はそれを捕まえてポケットに入れた。イモリは胸のポケットの中でおとなしかった。

やがて私は暗い森の中の窪地にやってきた。ワラビやゼンマイが生い茂るそのくぼみのまん中に、気味の悪い大きな花が柔らかい肉色の花びらを広げていた。

花の中央には直径が二十センチほどの鉢のようなものがあり、深い穴があいていた。中の壁はピンク色、底は薄い灰色で、透明な液体が中を満たしている。丸みを帯びたこの鉢が、この花のめしべなのだろうか……

私はイギリス人に教えられたとおりに、持ってきたハチミツの瓶の蓋を開くと、その中身をめしべに流し込んだ。それから、胸のポケットでおとなしくしている黄緑色のイモリをしっぽの先でつまむと、めしべの中に投げ入れた。イモリはしばらく透明な液の中を這うようにして泳いでいたが、やがて底の方へともぐっていき、姿が見えなくなった。

やることをやると、私はようやく一息つくために、盛り上がった木の根っこの上に腰を下ろした。しかし……見れば見るほどヘンテコな花だ……明るい橙色をした肉厚の花びらは所々が炎症を起こしたように腫れあがり、赤く変色している。めしべの鉢の外側は、縁の方は薄いバラ色、それに続く部分は肌色をしていて、地面に近い下の方には黒く短い毛のようなものが生えている。あと、ちょうど自分が立っている位置から見ると、めしべの右端と左端に、やはり肌色をした突起がある。先が尖がっていて持ち手のようでもあるが、よく見ると複雑に縮れていて、まるで人の耳みたいだ……

「みたいじゃない。耳だよ」

そう声が聞こえ、めしべがむくむくと動きだした。花のまん中からニューッとめしべの部分が伸びてきて、くるりと半回転すると、そこには男の顔があった。実際のところ、それはめしべなどではなく一人の人間の男だったのだ。そして鉢の形をした部分は男の開いたままの頭部で、その中の透明な液体は男の脳液らしい。

「あんたが入れてくれたハチミツのおかげでやっとまたものを考えられるようになったよ！ありがとう、きみ！ものを考えるには糖分が必要だからな」

そういうと男は花の形をした穴の中から外に出て、大きく伸びをしたかと思うと、両手を膝に当てて屈伸運動を始めた。

「それじゃイモリは？」

「いい質問だ」と男は屈伸運動をしながら、さも嬉しそうに笑いながら答えた。「あのイモリはイギリス人の家で飼われていたわけだが、イギリス人ってやつは、ほら、いつも紅茶を作っては、それをそのままテーブルの上に放っておくだろ？……おや、きみは彼らの茶会を知らないのか？……まあいいや。で、紅茶を放っておくと、当然のことながら、紅茶キノコができる……おやおや、また困ったような顔をしているな。きみはまさか、紅茶キノコを知らないのか？まったく不勉強だねきみは……紅茶キノコってのはね、放置されたままの紅茶の上にできる、白いカビの玉のことなんだよ。で、イギリス人のあらゆる家庭の食卓には、この紅茶キノコがいつも置いてあるわけさ。そしてあのイモリはこの紅茶キノコを喰って生きているんだ。おや……何か変だな……」

男は屈伸運動をやめると、まるでそうすれば自分の頭の内側が見られるかのように黒目を上に向けて眼球を回転させた。同時に舌で上あごの裏あたりをねぶっている……

「まあいいや。で、私はこの通り頭が開いているでしょう？だから雑菌が入ってカビが生えやすいの。そのカビが紅茶キノコと似てるから、イモリはカビを食べてくれるのよ。あら……何か変ね……」

男はキッとこちらを向くと、疑いに満ちた三角の目で私を睨んだ。

「あなた、私の頭の中にいったい何を入れたの？」

「だから、ハチミツとイモリを……」

「どのイモリよ？あれやだわ一何か言葉がへん！ちゃんとイギリス人から渡されたやつでしょうね？それとも、まさか道の途中で拾ってきたイモリを入れたんじゃないでしょうねえ？ねえ？」

「いえ、まさか……」

「いやそうよ！ちゃんとあなたの顔にそう書いてあるわ！ぶっちゃけ私は道でイモリを落としました、だから別のやつを拾ってきてあなたの頭の中に入れましたって！そうでしょ？そうなんやろ？」

私はどう言い逃れをすればいいのか分からなくて黙り込んだままだった。

「あーまったくなにしてくれんねんこのタコ！ここいらのイモリは雑食性なんやで！脳が喰わてしまうやないの！ほら！これ持って！これで頭ん中からあんたのイモリをどつき落としてや！」

男はそう言いながら近くに生えていた太い茎の植物を引きぬくと、手早く葉をとって一本の棒にして私に渡した。そして男はもといた花のまん中にあぐらをかいて座り込むと、「ほら、はよう！」と私をせかした。

私は恐る恐る男の開いた頭のそばによると、その中を覗きこんだ。そしてまた黙り込んだ。

もう手遅れだった……男の脳みそには、ちょうど夏になると蝉が地面から這い出してくる、あれくらいの大きさの穴があちこちに開いていた。さっきまでは透明だった脳液は白く濁り、引きちぎられた白子のような脳みその破片があちこちに漂っている……

「どうしたん？はよしてや！たのむで！はよう……」

しゃべり通しだった男が突然押し黙ったので私はハッとした。男の口からは、何かを舌でねぶるような音が聞こえてくる……

私はじっと耳を澄ましたまま待った。何かが起こるのを。何かがやってくるのを。

これが心なのか……べちゃべちゃと男の舌がたてる音を聞き、濁った脳液に見入りながら、私はいつしか安心してた。まるで男の心の状態を、自分の中で再現しようとするかのように……そしてさっき男が渡してくれた草の茎で、無意識のうちに男の脳液の表面をかき回しているのだった。他の命に自分の命の根っこを握られたときみたいにドキドキして、淡い吐き気をこらえながら……

すると、そのときどこかで「ピ」という甲高い音がした。

「ピ。ピ。ピ。ピ。ピピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピピピピ」

イモリだ。あいつが男の脳の奥にもぐり込んだまま鳴いているのだ……

私が男の脳液に人差し指の先を浸すと、イモリは一つの穴の中から後ずさりに現れた。見ると、口に小さなクワイのようなものを咥えている。穴から出ると、イモリは口からそのクワイ状のものを離し、すいすいと濁った脳液の中を泳いで私の指に辿りつき、手をよじのぼってきた。

イモリは手首のところまでくるとそこでとまった。私とイモリの目と目があった。じっとイモリの黒くつぶらな目を見つめながら、私はふと自分の思うに任せぬ恋のことを思い出した。そして私は思ったのだった。恋のことならめしべによりも、むしろ澄んだ空気の中を縦横に飛びまわりながら恋のさや当てに明け暮れる、森の小鳥たちにこそ相談すべきなんじゃないだろうか……

イモリがすっぽりと胸のポケットにもぐり込むのを見届けてから、私は男をその場に残し、森のさらに奥深くへと続く道先へ進んだ。